

# 地域社会におけるドメスティック・バイオレンスの実態 —言葉による暴力の実態分析—

関井 友子\* 遠藤 織枝\*\* 大塚 明子\*\*\*

The state of domestic violence in a community:  
Analysis of the state of verbal violence

Tomoko SEKII, Oriie ENDO, Meiko OTSUKA

## 1. 目的と方法

本研究は一般地域住民を対象にドメスティック・バイオレンス（DV）の実態を把握することを目的としている。特にDVでの精神的な、言葉による暴力実態を明らかにする。これまでのDV研究では身体的な暴力が中心に扱われてきた。それは身体暴力の被害が深刻でありその対応・援助が緊急の課題であるという理由に他ならない。しかし、言葉を中心とした精神的暴力は被害者にとって程度の軽いものであると言えないのではないか、その実態を把握し対応・対策を講じる必要があるのではないかという問題意識に基づき今回の調査は行われた。特に言葉はコミュニケーション手段であり、DV対応において2次被害を引き起こすことも指摘されている。結果は行政などの相談窓口において活用され、今後のDV対策への貢献が期待されるものである。

対象は埼玉県草加市在住の満20歳以上の市民で、調査は草加市役所総合政策部人権共生課との

共催で実施した。住民基本台帳から年代別、性別に2000人を無作為に抽出し、2007年3月17日～3月31日に自計式郵送調査で行われた（表1）。分析対象は560名（回収率28%）である。

## 2. 対象者の属性

対象者の主な属性は次のとおりである。性別は女性の比率が若干高く、56.0%、男性が44.0%となっている（図表2）。

結婚状況については、現在結婚しているのが74.5%、未婚者は14.7%、死別者は6.1%、離婚経験者が4.7%となっている（図表3）。

年齢は60歳代が最も多く、24.4%で、次に30歳代が19.4%、50歳代が17.9%、40歳代が15.4%、70歳代が14.7%、最も少なかったのが20歳代で8.2%となり、本調査の対象者は比較的高年齢層が中心となっている（図表4）。

職業については、回答者は家事専業、つまり専業主婦が最も多く、21.1%で、次に無職が

表1. 性別年代別対象人数

(人)

	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	60歳代	70歳代	計
女性	148	224	144	176	174	134	1000
男性	153	247	163	171	162	104	1000

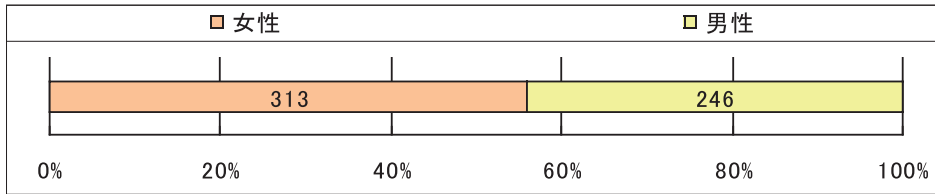
\* せきい ともこ 文教大学人間科学部人間科学科

\*\* えんどう おりえ 文教大学文学部日本語日本文学科

\*\*\* おおつか めいこ 文教大学人間科学部人間科学科

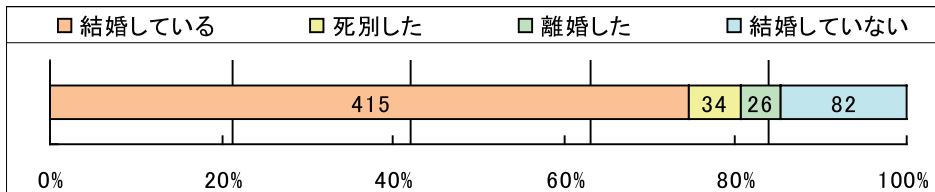
図表2. 性別 % (実数)

女性	男性	合計
56.0 (313)	44.0 (246)	100 (559)



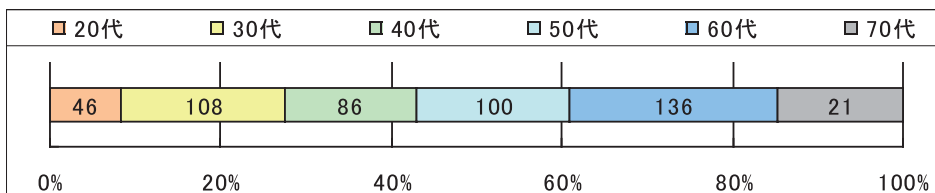
図表3. 結婚状況 % (実数)

結婚している	死別した	離婚した	結婚していない	合計
74.5 (415)	6.1 (34)	4.7 (26)	14.7 (82)	100 (557)



図表4. 年齢 % (実数)

20代	30代	40代	50代	60代	70代	合計
8.2 (46)	19.4 (108)	15.4 (86)	17.9 (100)	24.4 (136)	14.7 (82)	100 (558)



17.4%と続いている（図表5）。時間的に余裕のある層からの回答が中心となっている。郵送調査の回答の特徴だといえよう。

学歴では高卒が最も多く37.6%、次いで大学・大学院卒が20.7%、中学卒16.7%となっている（図表6）。

### 3. 実態分析—家庭内での「どなる」「どなられる」ことば—

2001年4月に制定されたDV防止法が、2004年12月の改正に続いて本年2007年7月に改正さ

れた。

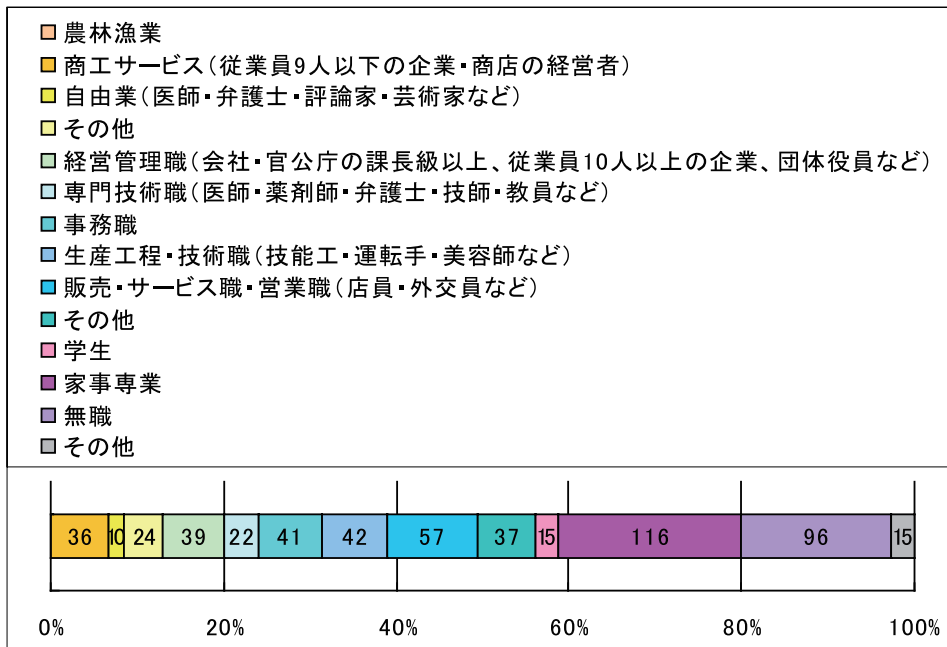
『朝日新聞』（07.9.11）には、

今年7月の改正では、身体的暴力に加え、生命などに対する脅迫も保護命令の対象に含まれた。加害者からの夜間の電話やメール、著しく乱暴な言動も禁止される。

と記される。従来の肉体的家庭内暴力のほかに、ことばの暴力も保護命令の対象になったのである。その言葉の例として、『毎日新聞』（8月26日）は次のような事例を挙げている。

「文句があるなら言ってみろ！」横浜市在住

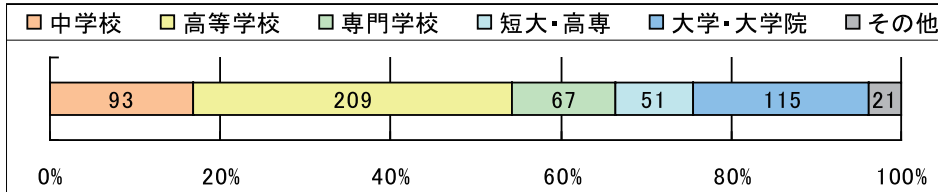
図表 5. 職業		% (実数)
自営業	農林漁業	0.2 (1)
	商工サービス (従業員 9 人以下の企業・商店の経営者)	6.5 (36)
	自由業 (医師・弁護士・評論家・芸術家など)	1.8 (10)
	その他	4.4 (24)
会社等勤務	経営管理職 (会社・官公庁の課長級以上、従業員 10 人以上の企業、団体役員など)	7.1 (39)
	専門技術職 (医師・薬剤師・弁護士・技師・教員など)	4.0 (22)
	事務職	7.4 (41)
	生産工程・技術職 (技能工・運転手・美容師など)	7.7 (42)
	販売・サービス職・営業職 (店員・外交員など)	10.3 (57)
	その他	6.7 (37)
	学生	2.7 (15)
その他	家事専業	21.1 (116)
	無職	17.4 (96)
	その他	2.7 (15)
	合計	100 (551)



図表6. 最終学歴

%(実数)

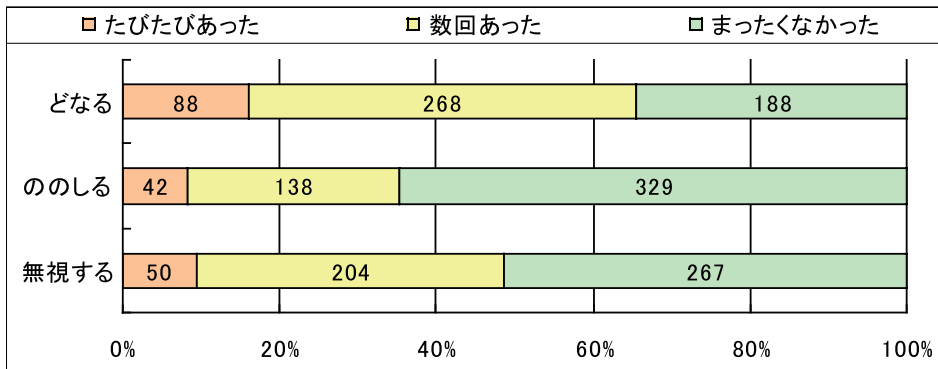
中学校	高等学校	専門学校	短大・高専	大学・大学院	その他	合計
16.7 (93)	37.6 (209)	12.1 (67)	9.2 (51)	20.7 (115)	3.8 (21)	100 (556)



図表7. 家族への暴力

%(実数)

	たびたびあった	数回あった	まったくなかった	合計
1 どなる	16.2 (88)	49.3 (268)	34.6 (188)	100 (544)
2 ののしる	8.3 (42)	27.1 (138)	64.6 (329)	100 (509)
3 無視する	9.6 (50)	39.2 (204)	51.2 (267)	100 (521)



の男性公務員(43)は、結婚以来妻の家事に文句をつけてはどなり散らした。……ただ、「殴れば妻を失う」と手は上げなかった。同紙は続けて、

「暴力」は殴るけるなどだけではない。改正法では、言葉の暴力も保護命令の対象になった。

と、朝日が「著しく乱暴な言動」とやや抽象的に書くのに対して、より具体的に記している。このように「ことばの暴力」が防止法に加えられる、つまり法律の対象になるという事実は、実態が無視できないまでに広がり、被害を受けている人が多く存在することが前提にあると考えられる。そ

の事実を減らし、被害をなくすためにはどうすればいいのか。法律を改正すれば解決するのか。

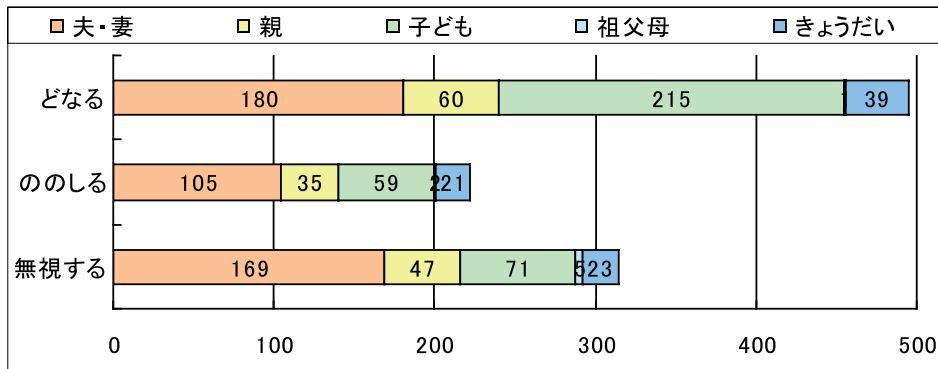
ことばの暴力の被害は、肉体的暴力のように外に現れない。そのため、問題が顕在化しなくて社会問題となりにくい。その結果、家庭内で存在し続けて、被害者の泣き寝入りが続く。

遠藤は、2003年5月12日の毎日新聞の「どならないで」の投書と、それをきっかけに次から次へと続いた同じ類の投書の波が忘れられない。あまりの反響に、同紙は特集を組み、最終的には、投書を集めた本を刊行した。5月から8月までに300通の投書が届いたという。それほど、家人からどなられて傷ついている人が多いことが明るみ

図表8. 家族への暴力の相手

% (実数)

	夫・妻	親	子ども	祖父母	きょうだい	合計
1 どなる	36.4 (180)	12.1 (60)	43.4 (215)	0.2 (1)	7.9 (39)	100 (495)
2 ののしる	47.3 (105)	15.8 (35)	26.6 (59)	0.9 (2)	9.5 (21)	100 (222)
3 無視する	53.7 (169)	14.9 (47)	22.5 (71)	1.6 (5)	7.3 (23)	100 (315)
合計	44.0 (454)	13.8 (142)	33.4 (345)	0.8 (8)	8.0 (83)	100 (1032)



に出た。それらの投書と、投書を集めた本『お父さん、どならなくて』（毎日新聞社2003）を基に、「どなられる」人や、「どなる」人、「どなる」理由、その処置などについて調査した。どなられる人のほとんどが女性であった。ジェンダーの観点からも衝撃的であった。それ以来、ことばの暴力をなくすにはどうすればいいのか、まず、その実際を明るみに出すことが必要であろうが、その実際を知るにはどうすればいいかと、考え続けている。

### 1) 「どなる」「どなられる」実態

以下に、今回の調査のことばに関する部分について述べていく。

「これまでに、あなたは家族に次のようなことをした経験がありますか。」についての回答が図表7である。「どなる」ことが「たびたびあった」「数回あった」人は65.5%となった。「無視する」ことは48.8%が行ったことがあると回答した。「ののしる」行為では35.4%がそのような行為を行ったと回答している。

「どなる」「ののしる」「無視する」相手は誰かという問への回答結果が図表8である（複数回

答）。「どなる」相手は「子ども」に対してが最も多く、43.4%で、次に「夫・妻」の配偶者が36.4%となっている。「無視する」相手は配偶者が最も多く53.7%であった。「ののしる」でも配偶者へが47.3%と最も多くなっている。

「どのような言葉で『どなる』『ののしる』ことがありましたか」（複数回答）への回答結果が図表9である。「うるさい・だまれ」が最も多く、次いで「バカ」、「グズ・早くしろ」と続いている。

次に「どなられる」「ののしられる」「無視され続ける」経験に対する回答結果が図表10である。「どなられる」経験は45.0%あり、「どなる」ことよりも少なかった。「ののしられる」ことでも、28.0%は加害経験よりも少ないという結果だった。「無視され続ける」ことにおいても、そのようなことを22.1%が経験しており、これも「無視する」ことより少ないという結果だった。

「どなられる」「ののしられる」「無視され続ける」相手は誰かという問への回答結果が図表11である（複数回答）。これらの行為はいずれも、配偶者から受けたと答えた割合が最も多くなっている。

前問で、「夫・妻」からどのような言葉で「どなられる」「ののしられる」ことがあったかについての回答が図表12である（複数回答）。最も多かった言葉は「うるさい・だまれ」でこれは加害経験と同様に多かった。加害経験と異なっているのは、「だれのおかげで生活できると（だれが食べさせていると）思っているんだ」が比較的多く言われていることである。

## 2) 属性分析

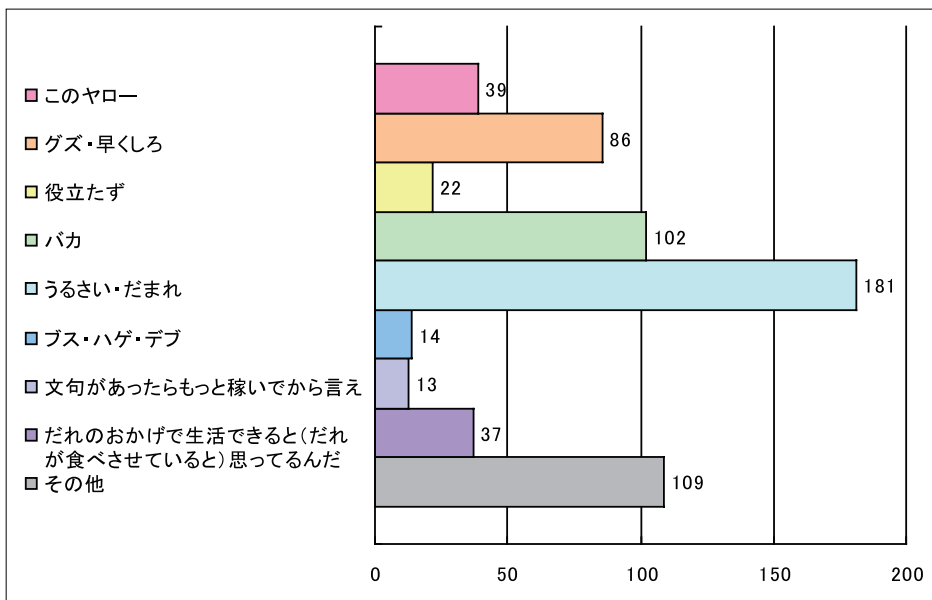
### i) 加害経験

設問で、どなった経験が「たびたびあった」と「数

回あった」と答えた人を、「どなった経験がある」人として、性別で見ると、「どなった経験のある」回答者は女性では197人、全回答者の62.9%である。男性では159人64.6%であった。どなった経験の有無では女性、男性の差はわずかであった。しかし、「どなった」ことのある相手を尋ねた結果では、男女差が大きく開いた。相手別に見ると表13のようになる。

女性では「どなった」相手の多い順に「子ども・夫・親・きょうだい」となっているが、男性では、「妻・子ども・親・きょうだい」の順になっている。女性が子どもをどなると同じ比率で男性は妻

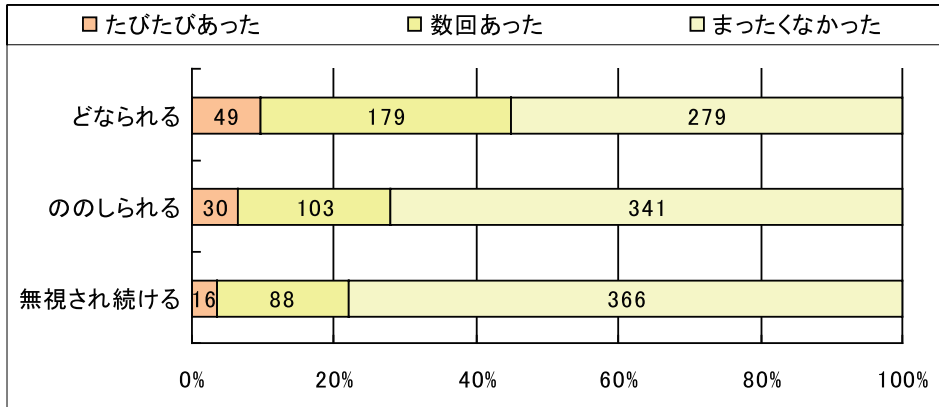
	% (実数)
このヤロー	6.5 (39)
グズ・早くしろ	14.3 (86)
役立たず	3.6 (22)
バカ	16.9 (102)
うるさい・だまれ	30.0 (181)
ブス・ハゲ・デブ	2.3 (14)
文句があつたらもっと稼いでから言え	2.2 (13)
だれのおかげで生活できると（だれが食べさせていると）思ってるんだ	6.1 (37)
その他	18.0 (109)
合計	100 (603)



図表10. 家族からの暴力

% (実数)

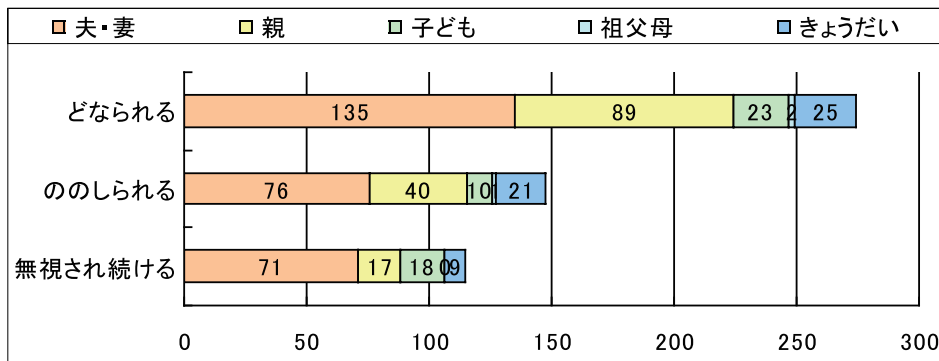
	たびたびあった	数回あった	まったくなかった	合計
1 どなられる	9.7 (49)	35.3 (179)	55.0 (279)	100 (507)
2 ののしられる	6.3 (30)	21.7 (103)	71.9 (341)	100 (474)
3 無視され続ける	3.4 (16)	18.7 (88)	77.9 (366)	100 (470)



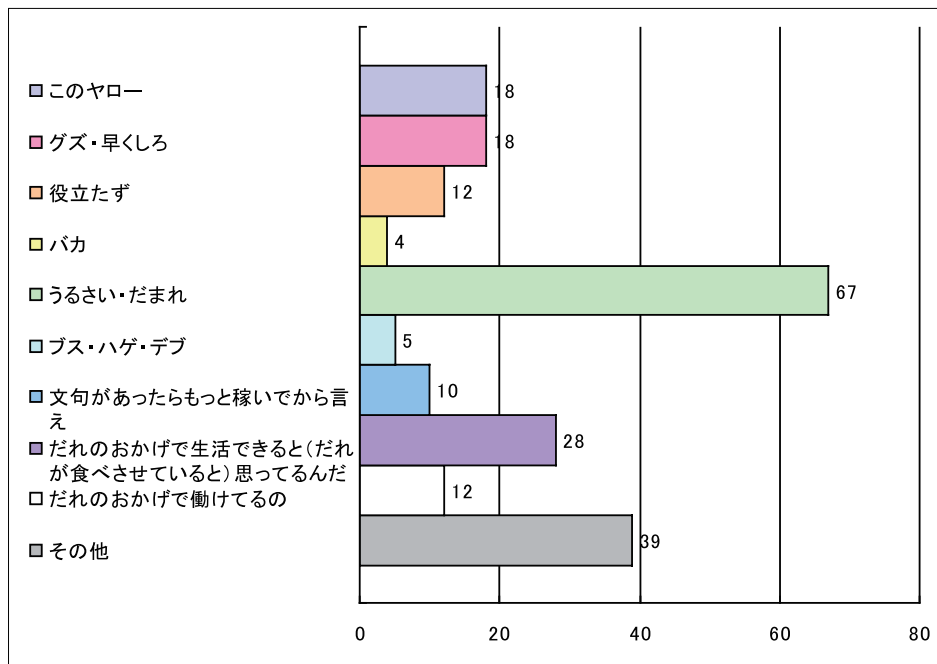
図表11. 家族からの暴力の相手

% (実数)

	夫・妻	親	子ども	祖父母	きょうだい	合計
1 どなられる	49.3 (135)	32.5 (89)	8.4 (23)	0.7 (2)	9.1 (25)	100 (274)
2 ののしられる	51.4 (76)	27.0 (40)	6.8 (10)	0.7 (1)	14.2 (21)	100 (148)
3 無視され続ける	61.7 (71)	14.8 (17)	15.7 (18)	0.0 (0)	7.8 (9)	100 (115)
合計	55.9 (147)	21.7 (57)	10.6 (28)	0.4 (1)	11.4 (30)	100 (263)



図表12. 家族からの言葉の暴力	% (実数)
このヤロー	8.5 (18)
グズ・早くしろ	8.5 (18)
役立たず	5.6 (12)
バカ	1.9 (4)
うるさい・だまれ	31.5 (67)
ブス・ハゲ・デブ	2.3 (5)
文句があつたらもつと稼いでから言え	4.7 (10)
だれのおかげで生活できると(だれが食べさせていると)思ってるんだ	13.1 (28)
だれのおかげで働けてるの	5.6 (12)
その他	18.3 (39)



にどなっているのである。「夫→妻→子ども」へと、強いものから弱いものへと「どなる」対象が向かっているのである。

「どなった」り、「ののしったり」したことばをきいているが、ここでは「どなる」「ののしる」の語義的相違は問わないで、尋ねているので、「どなった」ことばとして一括して集計する。選択肢を示してそこから選ばれた回答を多い順に整理すると表14、のようになっている。

「どなった」ことばの総計は女性が選択肢で

235語群、自由記述が45語群で計280語群、男性が選択肢259語群、自由記述が26語群、計285語群である。「どなった経験」のある人で単純にその頻度を計算すると、女性が1.43語群、男性が1.80語群となり、一人あたり「どなった」言葉群は男性のほうが多い。

「どなった」ことばで、一番多いのは男女とも「うるさい・だまれ」であるが、全体の中での比率は男性40.5%に対して、女性は32.3%である。他に男女の差が開いているのは「このヤロー」で、男



表13 「どなった」ことのある相手 複数回答 % (実数)

どなった相手	女性	男性	計
夫・妻	40.1 (79)	65.6 (101)	180
親	15.7 (31)	18.8 (29)	60
子ども	67.2 (133)	53.2 (82)	215
祖父母	0.5 (1)	0 (0)	1
きょうだい	10.6 (21)	11.7 (18)	39
回答者数	(197)	(159)	352

(%は回答者数に占める割合)

表14. どなったことは<sup>注1</sup> % (実数)

女性			男性		
1	うるさい・だまれ	32.3 (76)	1	うるさい・だまれ	40.5 (105)
2	グズ・早くしろ	22.1 (52)	2	バカ	20.1 (52)
3	バカ	21.3 (50)	3	グズ・早くしろ	13.1 (34)
4	誰が食べさせている	7.2 (17)	4	このヤロー	10.8 (28)
5	役立たず	6.4 (15)	5	誰が食べさせている	7.7 (20)
6	このヤロー	4.7 (11)	6	役立たず	2.7 (7)
7	ブス・ハゲ・デブ	3.0 (7)	6	ブス・ハゲ・デブ	2.7 (7)
7	稼いでからいえ	3.0 (7)	8	稼いでからいえ	2.3 (6)
		100.0 (235)			99.9 (259)

注1 文法的には、「うるさい」「バカ」などは1語の単位、「このヤロー」は連体詞+名詞で句の単位、「早くしろ」は副詞+動詞で文の単位と、それぞれ単位は異なるが、一括して「ことば」として論を進める。

性10.8%に対して女性は4.7%と、半数以下である。「バカ」「グズ・早くしろ」や「ブス・ハゲ・デブ」「稼いでからいえ」は男女の差が少ない。

その他で自由に記述されたものは、具体的に「どなった」ことばの例数としては女性が45例、男性が27例であった。そのことばを表現類型別に分類してみる。「早くしろ」のようなものを「命令型」、「うそをつくな」のようなものを「禁止型」、「バカ・うるさい」などを「断定型」、「しっかりして・いいかげんにして」などを「依頼型」、「誰が食べさせている」のようなものを「疑問型」とする。この五つの型を「命令・禁止型」「断定型」「依頼型」「疑問型」の4つに整理して以下自由記述の語群を分類する。

「依頼型」とはいえ、実際に依頼しているわけではない。「いい加減にして」などは、「いい加減にしろ」という言い方もあり、これらは命令

型に分類される。したがって、「いい加減にして」と型では依頼表現であっても表現意図は命令と考えられる。つまり、意図と表現形式は必ずしも一致していない。しかし、命令型と依頼型とでは、「どなる」強さが異なるので、「どなる」言語行動の強弱の観点から見るために、型に分けることも有効だと考えて分類を行う。言語行動の強弱からみると、「命令・禁止→断定→依頼→疑問」の順で強さは減ってきている。もちろん、「命令」の「早くしろ」と断定の「バカ」とどちらが強いかは、一概には言えない。その時の話者の声の大きさ、表情の厳しさ、身体的行為の関わりなどで、表現の強弱は影響されるからである。

とはいえ、断定の「バカ」と、疑問形の「バカじゃない？」とを比較すれば、言語行為としては断定の「バカ」の方が強いといえるので、アンケートでは区別できない音声の強弱や身体的条件

## 自由記述の表現別類型

命令型・禁止型	女性	泣くのをやめなさい、嘘をつくな、など	8
	男性	言うことをきけ、早く寝ろ、など	7
断定型	女性	しつこい、もう何もしてやらない、など	11
	男性	バカヤロー、バカタレ、クソババア、など	9
依頼型	女性	いいかげんにして、しっかりして、など	18
	男性	いいかげんにして、ちゃんとやって、など	3
疑問型	女性	それでいいと思っているの、何様だと思っているの、など	8
	男性	何やってんだよ、同じくらい稼げるのか、など	7

を除いて言語形式だけで、判断できる部分だけを行うことにする。

ここで、わかるのは、「依頼型」が女性に多いことである。男性も同じ表現を使っているが頻度が女性の6分の1である。自由記述で女性が「どなった」ことばで一番多いのが「いい加減にして」なのである。自分に不都合な行為を相手がしたときに「やめろ」というか「いいかげんにして」というか、比較すれば、後者の方が間接的で、穏やかな表現であることは言うまでもない。

他の型では数量的な差はあまりないが、ことば自体を見ると、相違があることがわかる。「断定型」でみると、男性は「バカヤロー・クソババア」のように、単語を投げつける罵倒語となっているが、女性は「もう何もしてやらない・アンタに言われたくない!」のような、文の単位で「どなって」るのである。文の長さは、丁寧度に比例するの

で、女性のほうはより「丁寧に」「どなり」、男性の方がストレートに「どなる」ため、怒りや非難の表現意図の効果は強いのである。

命令・禁止型でも数的な差はあまりないが、女性では「泣くのをやめなさい・いいかげんにしなさい」のような丁寧語の命令表現があるが、男性にはこの種のもはなく、すべて「呼ばれたらすぐ来い・言うことをきけ」のような直接的な命令である。女性の方が、命令形でも丁寧な方を選ぶことがあることがわかる。

## ii) 被害経験

「どなられた経験」がある回答者を「たびたび」と「数回」を合わせると、女性では、142人、男性では86人であった。総数に占める比は女性か48.6%に対して男性は40.0%で、女性の方が10%近くも多くなっている。

表15 「どなられる」ことば % (実数)

女性			男性		
1	うるさい・だまれ	34.2% (50)	1	うるさい・だまれ	26.2% (7)
2	誰が食べさせている	18.5% (27)	2	バカ	24.6% (16)
3	バカ	17.1% (25)	3	誰のおかげで働けている	15.4% (10)
4	グズ・早くしろ	10.3% (15)	4	役立たず	10.7% (7)
5	このヤロー	9.6% (14)	5	稼いでからいえ	7.7% (5)
6	役立たず	3.4% (5)	6	このヤロー	6.2% (4)
6	稼いでからいえ	3.4% (5)	7	グズ・早くしろ	4.6% (3)
8	ブス・ハゲ・デブ	2.1% (3)	8	ブス・ハゲ・デブ	3.1% (2)
9	誰のおかげで働けている	1.4% (2)	9	誰が食べさせている	1.5% (1)
計		100.0 (146)			100.0 (65)

そのどなられた相手を配偶者（以下は単純化するために男性の場合は「妻」、女性の場合は「夫」とする）に限ってみると、女性が夫から「どなられた」のが89人で「どなられた経験者」の中の62.7%、男性が妻から「どなられた」のは46人で「どなられた経験者」中53.5%で、女性の方が男性より10%近くも多く配偶者から「どなられて」いる。次に配偶者からどのようなことばで「どなられた」かを選択肢から選んでもらった結果を表15に示す。

女性が夫に「どなられる」のは「うるさい・だまれ」と高圧的に言論を封じられるのが最も多い。次は「誰が食べさせている」と、妻を経済的な弱者であることを確認させる表現で、妻の人権をひどく傷つける表現である。3番目、4番目、5番目までは、「バカ・このヤロー」などと、短く罵倒する表現で、一方的に強い語調で投げかけられる表現である。

男性が妻から、「どなられる」ことばも「うるさい・だまれ」が一番多いが、女性の場合より、全体に占める比率は低く、2番目の「バカ」との差が少ない。

3番目の「誰のおかげで働いている」は、夫が外で、いかによく働いて経済的に家族を養っていたとしても夫の力だけで働けるのではないと、妻が夫に妻の力の確認を求めるわけで、おそらく、この表現は、夫が妻に「誰のおかげで食べられているのか」と妻に弱者の立場を押しつけようとしたその反論として出てきたものであろう。だから、この表現は妻が夫から言われることはほとんどなく、1.4%といちばん低い比率になっている。

その他自由記述では「どなられた」ことばとし

て書かれているものは 女性13例、男性5例である。それを表現の型に分けてまとめると以下のようになる。

命令・禁止型は女性の側のみ、つまり夫から「どなられた」ことばにのみ見られる。夫は妻から、命令・禁止型で「どなられる」ことがないのである。依頼型は男性の側のみ、つまり、夫が妻からどなられた場合にのみ見られる。どなるときも妻のほうが男性より穏やかなのである。

表現型で分けてみると、「どなられる」ことばも、妻は夫から、夫が妻からどなられるよりも、激しいことばで、単刀直入にどなられる。夫は妻から命令・禁止のような強い表現でどなられるのではなく、「少しは手伝ってよ」と依頼形でどなり、しかも「少しは」のような副詞を伴って、表現を和らげている。疑問型でも、「もっと考えて行動したらどうなのよ」と副詞をともない、「どうなのよ」と相手に判断を委ねる表現である。

例は少ないが、自由記述でわかるのは、「どなられる」際に、妻の方がより厳しく激しくどなられ、夫の方は、より穏やかに「どなられている」という性差である。

以上を整理すると以下のようなになる。

- 1、家庭内では女性も男性も同じ程度に「どなられて」いる。
- 2、「どなる」相手を限定すると、夫→妻→こどもへと力関係の弱い順にその方向が向けられている。
- 3、「どなる」「どなられる」ことばは、男性のほうが短くストレートのもが多く、女性には長く、丁寧で、穏やかなものがある。

#### 自由記述の表現別類型

命令型・禁止型	女性	いいかげんにしろ、ふざけるな、など	3
	男性	なし	0
断定型	女性	気遣いでどうしようもない、だらしない、など	8
	男性	お酒の飲み過ぎ、むかつく、など	3
依頼型	女性	なし	0
	男性	少しは手伝ってよ（子どもの面倒）	1
疑問型	女性	どうして人の話をちゃんと聞かないんだ、これで掃除をしているのか	2
	男性	もっと考えて行動したらどうなのよ	1

この結果として、今回の調査では、家庭内でのことばの暴力は確かに存在し、女性のほうにより被害者が出ていることが推定される、と結論づけられるように思う。

「バカ・ブス・デブ」のような罵倒する語は、差別語として、マスメディアでは使われなくなっているし、一般社会でも、直接相手に向かって差別語や罵倒語を投げかけたりすることは、避けられるようになってきている。その一方で家庭内では密室だからとして、こうした差別的言動がまかり通っている。このことは、人権意識がまだ一部分にしか浸透していないことを物語っている。ことばの暴力も人権侵害であるという認識を広め、人権尊重の意識を家庭内から根づかせることが肝要であろう。

#### [参考文献]

- 遠藤織枝(2003)「男はどなり、女はどなられる—新聞投書集『お父さん、どならないで』と新聞記事検索データから」(『ことば』24号現代日本語研究会)
- 遠藤織枝(2005)「差別語不快語の60年」(中村明ほか編『表現と文体』明治書院)